

II-6. 学びの森の風景

学びの森の住人たち

(8)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 **北村真也**



8-1. コトバが生まれる時

「ボクは、病人として生きていたいわけじゃない」

そう私たちに話してくれたのは、中学3年生のタクヤでした。タクヤは、小学校に入学したころから地域の医療センターにかかり、ドクターの指導の下に薬を服用していました。彼は、学校の騒がしさに耐えきれないという理由で、少しずつ中学校を休むようになっていき、とうとう2年生からは、ほとんど学校へ行かなくなってしまいました。

そんなタクヤがアウラを訪ねたのが中学2年の冬でした。そしてそれから1年が過ぎ、彼もとうとう高校受験を間近に控えるようになっていました。この1年の間、幾度となくタクヤは不安定な状態を乗り越えてきました。ある時は、このままアウラを続けることが危ぶまれた時もありましたが、何とかそれを乗り越えてきました。そして

夏頃からは急にたくましくなって、大変安定した状態が続き、それにもなって学力も急に伸びてきたのです。いや、あるいは学力が伸びてきたことで自信を獲得し、精神的に安定してきたのかもしれませんが。とにかく、紆余曲折はあったものの、タクヤは確実に力をつけてきたように思います。

ある日、医療センターに行ってきたタクヤが顔を赤らめて私たちのもとへとやってきました。そしてこう言ったのです。

「ボクは、病人として生きていたいわけじゃない」と…。

ドクターは、タクヤがストレスを抱えることと不安定さが大きくなるので、なるべく生活にストレスがかからないことを指示されたそうです。だから志望校も決して無理せず、身の丈以下の学校を薦めるのです。でもタクヤには、どうしてもチャレンジした

い学校があったのです。そこで生まれたのがこのコトバだったのです。

「ボクは、病人として生きていたいわけじゃない」そう私たちに話してくれたコトバの後に続く彼の思いは、「もっと勉強もしたいし、もっと友達も欲しいし、もっとクラブ活動もしたいし、普通の高校生として生きていきたい」というごくあたりまえの願いだったのです。そしてこのあたりまえの願いをタクヤ自身が、コトバで表現しそれを口にしたことは大きな意味がありました。それを語ることで、彼は自分自身を「発達課題を抱えた不登校」というラベルが張られた中学生から、「受験生」へと自身を変容させていったのかもしれませんが。

不登校の子どもたちに日々接していると、彼らが大きく変容するポイントがあることがわかります。私たちから見て「もう大丈夫」と思える瞬間がやってくるのです。この変化は、非連続の変化です。何かの階層が変わるようなものなのかもしれません。そして、この変容のポイントを迎えるにあたって、子どもたちは自分の苦しかったこれまでを振り返りそれをコトバにするのです。最初は どうして苦しいのか、そのことをほとんどの子どもは表現できません。逆説的にいうと、表現できないから苦しいのかもしれません。でもやがてこのような状態から子どもたち自身が何らかのコトバを持ち始めます。それはまるで、P.フレイレの〈識字教育〉における対話の世界のように、コトバを持った彼らは自身の物語を語りだすようになっていくのです。そしてその物語は、ある種の感動を伴って他者へと

伝わり、子どもたちの思いが共有されていくのです。

「ひきこもりは、3年すれば飽きる」これは高校を1年で辞め、その後不登校となり、やがて自宅で3年間ひきこもるようになっていったキヨシのコトバです。彼は「1年目はまだよかった。でも2年目からはやる事がなくなって苦しくなって、3年目はほとんど気が狂いそうだった」と言います。そんなキヨシが、私たちに自分がひきこもっていた時のことを話し出すようになったのは、アウラの森に来てようやく半年ほどたった時のことでした。キヨシもやはり、自分のつらかった過去を物語るためには時間が必要だったのです。

この章の中では、不登校の子どもたちが自分の物語を自分のコトバで語りだすということの意味を彼らへのインタビューを通して聞きたいと思います。彼らはアウラの森で誰かと出会い、その出会いを通して自分のコトバを獲得しその物語を語り始めるのです。そしてさらに、その物語が媒介となって、彼らを取り巻く家族や友達、学校の教師たちが彼らをあらためて理解し、彼ら自身もまた変わり始めるのです。



教室に入れなかった少女

「過敏性腸症候群(IBS)」に苦しむ子どもたちを、私たちは今まで何人も見てきました。彼ら彼女らの多くは、腹痛や吐き気のため教室に入ることができません。教室に入ること自体が、大きな不安を作り出すのです。「またトイレに行きたくなくなったらどうしよう…」そんな思いが、幾度も頭をよぎることになるのです。今年 20 歳になるユキエも中学時代からずっと腹痛に苦しみ続けていたのです。

「ユキエがアウラに来たのは、いつだったけ？」

「5月」

「5月、ということは1年少し前？」

「うん、体験は4月20日」

「どうしてそんなこと覚えてるんの？」

「なんか覚えてる」

「4月20日に体験に来て…」

「ということは、1年3ヶ月」

「うん」

「そうか…、そしたら、1年3ヶ月前、ずっと家にいてた？ここに来る前ってどんな生活を送っていたの？」

「うーん、家かな。家と…少し前は、理容室のバイトみたいなことはしていたけど、でもそれをやめてからはずっと家っていう状態になって、それからアウラへ来たみたいな。行かなくなってから…」

「美容室って散髪屋？散髪屋のバイ

ト？何やっていたの？」

「うん、出張の…」

「え、それどういうこと？出張のバイトって高齢者の？」

「高齢者の人はなんか、老人ホームじゃないけど、デイケアのような、何だろう…？」

「ああ。老人ホームみたいなところ行って、散髪屋さんが髪の毛切って…」

「散髪屋さんが出張に行かはるから、それを手伝いに…」

「ああ、そういうことをやっていたのか。」

「うん。やっていた。知り合いのところだったから…」

「それ、どのくらいやっていたの？」

「どのくらいやってたんかな…でも毎日じゃないから、行かない日は家にいてた。」

「でもそのバイトも途中でやめているわけや。」

「そう。」

「で、やめてからここに来るまで、どのくらいの期間があるの？」

「えー、どうやら。うーん。いつやったかなあ。だって私、今何年生だったっけ？」

「何かもう訳のわからないことになっているよね」

「なってる」

「ちょっとまって。ユキエが最初に不登校になったのは中学？」

「2年」

「中学2年のいつ？」

「体育祭」

「ということは、秋？」

「秋」
「それは、何かきっかけがあった？」
「何か…友達、友達関係が最初にこじれて、それが嫌ってなってきたら…身体が…。何か、もう身体が、拒否してきて、オエッて吐くようになって…」
「そうだったの？」
「朝と、学校行きたくないって思うようになって、もうずっと下痢になったり…。それで、ちょっと行かなくなったら…」
「え、ごめん。その友達関係は、クラブの関係？」
「うん、クラブの友達」
「ふーん」
「仲良くしていた人に、同じクラブの人が多かった。全員じゃないけど、まあ、大半」
「そうなの。ユキエの仲の良かった友達は、同じクラブだったと。何部だったっけ？」
「テニス」
「そこで、いろいろトラブったわけ？」
「クラブでトラブったわけじゃないけど、うん…」
「それ一度聞いたことがあるなあ。何か、“あんたはどうなん？”とか聞かれても、“えーっ”っていつもニヤニヤしてしまうことで、キレられて…」
「そうそう」
「“何かどっちなの！”みたいな…」
「なんかそんなこと言ってたな」
「みんなのグループにいい顔、みたいな…」
「あー、そういう、まあ A グループか B グループがあって、どっちにもいい

顔してるし、“どっちなの？”みたいな感じで言われて…」
「その 2 つのグループは、けんかしてから別れたんだけど…」
「元々 1 つだったのが、A グループと B グループに分かれたんや、なるほど。それで？」
「それでさ、そのけんかに巻き込まれて、“あんたはどっちか決めろ” って。その 2 人の問題やんか、そのリーダー格の。それって何か、どうしてでなのみたいな。どうしてその 2 人のけんかのせいで、どっちかに入らなあかんのみたいな。わかる？」
「わかる、わかる。わかるよ。そう言われて…？」
「だから、そのまま。曖昧なまま…別に、みたいな…。そしたら “何でやねん” みたいになって…。それで結局、私が、ポツンと一人になることで、もめていた二人がくつつくわけ」
「あーなるほど！わかった。あいつが悪いみたいな話になって、だからあいつをいじめよう、あれしようみたいなことで結束していく…」
「そう」
「わかりやすい話やなあ、なるほど…。そうなって結構みんなからさんざんに言われたわけやな。コトバだけ？」
「いや、いろいろ…」
「何があったの？コトバ以外に…」
「なんか…態度にも表れた」
「どんなの？たとえば…」
「“何とかしてこい！”みたいな…」
「“何とかしてこい！”ってどういうこと？例えば…」

「“あいつにこう言え！”とか…」
「でそれ言いに行っていたの？」
「いや、なんか、“何で言わないとダメなの！”みたいな感じで言ったら、“何で言わないの！”みたいな感じになって…」
「その頃は、メールとかはあった時代なの？まだみんな携帯持ってなかった？」
「うーん、持っている人は持ってるみたいな…」
「でもあんまりみんな持っていたわけじゃない」
「メールで陰口とか、悪口があったりはしなかった？」
「そういうのもあったけど…」

ユキエは、女の子によくあるグルーピングのはざままで苦しんでいたようです。彼女がちょうど中学2年の時のことでした。自分がどうしたいか、あるいはどうしたくないのか、という意味をはっきり表現できなかったが故に、いじめの対象となっていたユキエ、そのきっかけはごく些細なことだったのかもしれません。

「そうか、それで結構ストレス抱えて、吐いたりとか、お腹痛になったりとか…。それまでは全然そんなことなかったの？」
「お腹はもともと弱かったけど、そういうことになってからは、もうずっと下痢になっていたから…」
「もともとそういう弱さは持ってたんだ」
「でもそれは新しい環境になった時だ

け。中1の初めとかはあったけど、中2はもう普通にできて…」
「吐くことも、もともとあったの？」
「いや、吐くことは…急に始まった」
「しょっちゅう吐くの？」
「朝、朝。」
「あー、朝。朝吐くの？」
「朝もそりゃ吐くけど、“もう気分悪い、うー”って感じ」
「もう“いつも吐きそうー！”とか“おなか痛いー！”っていう状況があって、学校に行けなくなったわけや」
「うん、そういう感じ」
「保健室登校はしていたの？」
「なんか、ずっと行けなくなっていたら、先生らが…というか、他にもいたんや、行けない人が、1人か2人。それで私が3人目になったことで、なんか違う部屋設けたほうがいいんじゃないかという話になって、その違う部屋に…」
「行き始めた？」
「うん、行くようになった。でも、行ってただけど、不定期にしか使えなくて…」
「その部屋が使えるのが？」
「そうそう。だからいきなり、“もうこの部屋なくすことになったから、明日から教室は行ってください”みたいな感じでいきなり教室に入れられることがあったんや」
「ほう。無理に？」
「そう、無理矢理」
「その部屋にいるときは安心できたの？」
「その部屋に行くときとか帰るときと

かは、めっちゃ隠れて…」
「あー、友達に会うわけや」
「そうそう」
「みんなには会いたくなかったんや。その生活がずっと続くわけ？3年になってもその生活は続いたの？」
「うん」
「もうずっと、中学校時代はもうそんなまま、中学校を終えるわけ？」
「うん。」
「友達関係はどうなったの？そのあと。」
「その友達？」
「うん」
「その友達も、うちが抜けたけど、こうあっちでは、いろんな…違うメンバーがこうやっっているんや」
「うんうん」
「で、だから、うーん」
「そいつも学校へ行けなくなってく…？」
「うーん、だけど結局またくっついてとか…よくわからへん」
「よくわからへん」
「うん、でもとりあえずうちは学校行ってへん…教室とか入ってないから、やっぱり言われる」
「陰でいろいろと…」
「うん」

友達同士の関係で大きなストレスを抱えることになってしまったユキエ。でもその根本にあったものは、彼女自身が自分のコトバを持っていなかったことかもしれません。もちろん読み書きに問題があるわけではありません。彼女はコトバを自由に扱え

たのですが、自分のコトバを持ち得なかったのだと思います。だから身体を使って表現せざるを得なかったのかもしれませんが。そしていつしか、その反応はパターン化されていったのです。

「それから、高校はA高校にいったんやね」

「そう」

「それで、そのA高校にそのグループの子は行かなかったの？」

「ううん、行った」

「あ、そうなんや?!」

「でもな、それは知らなかったんや。入学式で初めて知った、だって情報網がないやん」

「そんなの学校で教えてもらえるやろ、何それ？」

「それで、そのA高に入ったら、入学式にえーつ、ってなって、それがあってもう教室入れなかったの？」

「そうなって、なんか…」

「学校の先生も言ってくれたらよかったのになあ」

「まあ…」

「それでもう教室入れる状態じゃなく…」

「うん」

「そのいろいろ悪口言われたりするの、は高校に行っても続くの？」

「なんか、他の友達とかも、その友達のことうちは知らんけど、知らん人はうちのことなんか嫌ってはって、なんでこんな嫌われてるんやろうと思ってたら、やっぱり、そういうなんか中学の時のこと言ってるから…。何かそう

いう知らない人らにも言われて、何かもうあかんみたいになって…」

「そっか…、結局だからA高は、どれくらいでやめるわけ？4月に入学して、教室はほとんど入ってないんや？」

「どのくらいやろ…。実際には5月の連休前くらい」

「もうそのくらいで、もうやめようかなと決心するわけ？」

「もうずっと学校休みばなしやし、“行かな、やばいで”って言われるし、それももうなんか…」

「プレッシャーやった？」

「うん。どんどん、どんどん後ろ向きになってきたから。もう行かんとこって…」

「家では何してたの？学校に行かずに…」

「何にも…」

「着替えもせず…？ジャージみたいな恰好でずっといるわけ？」

「ああ…、でも生活リズムがおかしくなってきた…」

「ああ逆転。昼夜逆転で、ほんで…。あれどうして昼夜逆転になるの？」

「“寝れへん、寝れへん”ってなって思うようになって…」

「ああ、寝れへん寝れへんってなってか…。でもその年はずっとそんな生活のまま？」

「うん」

「それで次の年に、今度は定時制のB高校を受けるわけやろ？」

「うん、友達が、一年下で、B高行くから行こう、みたいな。うーん。その普通の高校に行けへんやん。あんまり

勉強してなかったし、定時制で卒業しようかなって思って、高校だけは…っていうことで、行ったけど、中学2年生とかから、あんまり集団の中に入れてなくなってきて、教室にも行ってないし、集団が…」

「集団が怖い？」

「なんか、うん…。でなんか、症状が出てきて…」

「ああ、お腹痛とか？」

「うん、それでまたひきこもることになってしまった」

「結局定時制はどのくらい通ったの？4月入学して、通ったの？」

「まあ、通った」

「どのくらい通ったの？1ヶ月くらい？」

「どっちのほうの方が長かったかなあ…。同じくらい」

「それも続かず、辞めちゃうわけや」

「というか、何か、ちょっとのこと言われるだけで、気にするとか…」

「言われてることがもう怖いわけや。何言われてるんかなとか…」

「そうそう」

「で、学校やめてどうしようと思ってたの？」

「通信制の高校かなと思ってた。高校は出ないとどこもさ、そのあと中卒で働くなんてありえへん。だから高校は出ないとあかんから、やっぱり通信やなって…」

「うん、なら通信に行こうとは思ってた」

「うん」

「だからB高も多分春にやめているわ

けやろ？」

「そう春に…」

「春に、もうそうやって行けなくなつて、次はもう通信かなあって思いながら、まだその年の夏が過ぎ秋が過ぎ、冬が過ぎ…、で、その次の年にアウラに来たんか？あるいは、もう一年先…？」

「たぶん、もう1年先…」

「なるほど、ということは、B高をやめてから約2年間ブランクがあってアウラに来たんだ」



二年前の私に言ってやりたい

その後、腹痛に悩まされ続けたユキエは、高校を2回中退します。腹痛に対する不安が大きくて教室に入れず、授業が受けられなかったからです。私立高校を辞め、翌年定時制高校を辞め、中学時代を含めると3つの学校に通うことができなかった彼女の経験がますます彼女自身を苦しめるようになっていきました。そして定時制高校へ行けなくなってから2年近く、彼女は自宅に引きこもるようになっていきます。しかし、そんな矢先に、ユキエのお母さんが偶然ア

ウラの森を見つけるのです。これもまた偶然の出会いから物語が始まるのです。

「アウラはどうやって見つけたの？」

「お母さんが探さってはって、それまでは、亀岡にあるとか知らなかった。お母さんがたまたまアウラの隣の病院に行かはって…」

「そうなの」

「そこに行ってはって、前通らはったら、看板を見て、こんなところあるんやあみみたいな感じで…」

「たまたま？」

「たまたま見つけやはった」

「それが、君の運命を決定づけた」

「そう」

「よかったなあ。お母さんが見つけてくれて。それで電話がかかって、ユキエがやってくるわけや」

「うん」

「アウラでは、最初から通えていたような気もするな。お腹が痛いとは言ってたけど。違ったっけ？」

「どうやったっけ…週2日やったっけ？」

「最初は週2日からやった。それからちょっとずつ増やして行って…」

「そう」

「それから友達もできて…」

「うん」

「それも大きい…、ちがう？」

「うん」

「だからまあ、周りに信頼できる、なんでも言えるいい友達がいる」

「うん」

「学校に行ってるときはやっぱり先生

も信頼してなかった、あんまり？」

「してなかった」

「アウラの先生とは、ずいぶん違う？」

「どうやら…、どうかな…。学校やったら、うち、めっちゃお腹痛くなるから、“トイレ行っていいですか？”ってなるやん」

「なるなる。それは、いややな」

「そんなん言ってたんやって…。授業中に2回くらい“トイレ行っていいですか？”って言った後に、もう授業とか、教室に戻りたくなくて…」

「2回も抜け出してたらなあ、わかるわかる。」

「そう、そういうのとかあるし…」

まずトイレのことが、ユキエにとっては大きな問題でした。みんな同じ行動が求められる学校において、授業中にトイレに抜け出すこのことが、とてもストレスを抱えることになってしまう。その点、アウラの森では、自由にトイレに行くことが保障されている。ここがユキエにとってことのほか大きかったように思います。

「ここは黙っていけるし、気が楽やんな。でもお腹痛いのもずいぶん良くなったやろ？」

「うん、何か…」

「めっちゃましになったんじゃない？」

「何か、あの時は無茶やったんやなって感じ…」

「どういうこと？」

「何か…ちょっとは成長したかなあって…」

「ほんま、前はなんであんなにひどかったんやって感じ…」

「前も、ちょっとは気持ち的な面もあったんやと思う。やっぱり気持ちやねん」

「精神的に、ってこと？」

「何か、うーん、ちょっとは考え方が変わったかなって思う」

「どんな風に変った？」

「ずっと嫌なことを言われてネガティブやったから…。“こんなこと言われてるわ”ってずっと考えたり…、気にしまくってたから…」

「今は、あんまり気にならなくなってきた？」

「ちょっと距離も持てるようになったし…」

「距離を置けるようになったってこと？」

「人と距離を置いて、“なんか、こう思ってるやろなあ”とか、思ったりすることもできるようになってきたし…」

「まあそこらへん、人間関係が上手になったわけや」

「上手ではないけど…」

「でもまあ、あんまりストレスかからずにやれるようになってきた？」

「うん」

「いや、ずいぶん明るくなったと思う。前はあんまり笑うこともなかった。ごまかし笑いみたいな…」

「そうそう、家にこもっていた時に全然家族とコミュニケーション取れない時期があって…」

「そうなの？」

「もう、ちょっと頭おかしかった」
「どういうこと、頭おかしいって？」
「こもりすぎて…なんかトイレ行った後に、なかなか帰って来ないと思ったら何か…」
「何してたの？」
「何かこうして…」
「髪の毛抜いてた？」
「それでお母さんが、“えー、何してんの！” って…」
「そんなに大変やったんや」
「だから精神科みたいところで薬ももらってたんや」
「どこへ行ってたんやっけ？」
「なんかもうめっちゃ行ってた。〇〇病院とか、〇〇クリニックとか、〇〇とか…」
「いくつも病院へ行ってたの？」
「うん、いろいろ行ってた…」
「あーほんとに」
「じゃあ、精神面でもめっちゃ成長してるやん」
「そうそう」
「それ知らなかったわ」
「うん、知らなかったと思う。ふふふ…」

子どもが一旦ひきこもると、一度は家庭内で地獄絵が繰り広げられるといます。ひきこもり経験者のキヨシは、「気が狂いそうだった」と表現し、ユキエはトイレで自分の髪の毛を引き抜いていた自分を振り返り「頭がおかしくなった」と表現します。つまり、ひきこもってしまうという状況そのものが、大きなストレスとなって子どもたち自身に返ってくるのです。今回私は、

このユキエの事実を初めて知ったのです。

「ユキエすごいやん。今では何かもうもう別人やなあ」
「うん…なんか…」
「車も運転できるし…」
「ほんまに！ふふふ…」
「テスト前になったらテスト勉強もするし、バイトもしようかって面接に行くし…」
「ははは」
「考えたらユキエすごいなあ。改めて聞いたら。ちょっと前までトイレの中で髪の毛引っこ抜いてたのに…」
「そうそう」
「それいくつのとき？」
「いつかなあ、高3かなあ？」
「でもまあ人間って変わるもんやで…そう思うわ」
「うん」
「何が一番ユキエの支えになったの？ユキエを変えたものは何なんや…？」
「何やろ…」
「何がユキエを変えていったんやろう。ここ毎日勉強してるだけやん言うたら。私が別にユキエに説教してるわけでもないし、薬をあげているわけでもないし…」
「周りの考え方も変わってきたから」
「周りの考え方？」
「何ていうか、次どうするの？とか、今後どうするの？って、親の考え方も変わってきて…。以前高校の時は、今日行かないと、もうやばいやんって感じやったんやけど、今は、大丈夫、大丈夫みたいな、そういう考え方に変わ

ってきてん。変わってきてくれた、環境が…」

「そうか、前は、“あんた行かへんかったらどうすんの”、“これからどうすんの”みたいな…」

「うち、こうされていたもん」

「ああ、追い立てられて、ひっぱられてた…ずっと？」

「早く！」みたいな」

お腹が痛くて家から一步も出れなかったユキエが、毎日家から出てアウラの森に通ってくる。家族からすれば、まさに奇跡のような現実が目の前に展開しているわけです。彼女が動き始めると、家族のかかわりそのものも変わっていったとユキエ自身は証言します。

今、ユキエは車に乗ってアウラの森へ通っています。この春に合宿免許に参加して車の免許を取得したのです。これも彼女にとっては大きな、大きな挑戦でした。合宿中、お腹が痛くなり、病院で点滴を打ってもらいながらも講習を受け続けたといいます。そんな彼女を変えたもの、それは一体なんだったのでしょうか？インタビューは続きます。

「アウラに来るようになって、そんなことから解放されて、“まあいいやん、ゆっくり考えたらいいやん”みたいに思えるように随分なってきた。これは大きいね。他には？」

「うーん、なんやろ、やっぱり考え方も自分でも、高校行けなくても、こういう道っていうか、あるんやなあみた

いな感じに思えるようになった」

「高校に行かんでも、ちゃんと勉強できて、次につなげていくような道がそういうあるんやと知ったっていうこと？」

「まあいろんな道が、あるなって思えた」

「そうやなあ。そういう子もおるからなあ。私も多分初めの頃にそういう話してるんじゃないかなあ。こんな子もいるよ、みたいな話。違ったっけ？」

「なんか大学の近くに住んでて、一人暮らししてて、最初は私みたいにお腹痛いって言っていた人」

「そんな話をしたなあ…。タエちゃんっていう子や。あの子も高1の時お腹が痛くて教室に入れずに、結局単位が取れなくなってしまって、アウラにやって来た。最初は、ここでもお腹が痛くて、よく泣いてたこともあったんやけど、だんだんそれを克服して行って、短大へ入学していった。それで短大を卒業してから同じ大学の事務で働き始めたんや。それから一人暮らしも始めて…、ほんとに変わっていった。でもタエちゃんじゃないけど、ほんまに人は生まれ変わるんやわ。でもユキエも半端じゃないよな」

「ふふふ」

「半端じゃないと思わない？ついこの間までトイレで髪の毛を抜いていた人やとみんな思わないんじゃない？考えたら、ついこの前やん。まあでも、よかったよね、色々。あと1年、あと1年半あるよな、次の進路まで…。あとは自分で自分の進路を決めていかなあ

かん。今度はユキエ自身が決めなあかん。そうやろ？誰に引っ張られるのではなく、自分で決めなあかんわけや。お菓子ばかり食べてる場合じゃないで」

「ははは」

子どもたちが変わり始める時に、そのモデルとなる子どもの存在は大きいと思います。自分と同じような状況を抱えた子が、実際に何かを乗り越え生まれ変わっていくように変容を遂げるその姿に、彼らは自分自身を重ねていくようです。自分の辛さをわかってくれるという思いと、その子も自分と同じ辛さを抱えながらそれを乗り越えていけるんだという思いの交差するところに彼らはその子を一つのモデルとして位置づけていくようです。

こんな風に不登校の子どもたちにとって、自分たちと同じような境遇に生きる仲間の存在はとてつもなく大きいのです。彼らは独立して存在する個人として変容するのではなく、その仲間、あるいは私たちとの関係性の中で変容を遂げていくのです。

「まあでも、こうやって朝からちゃんと来ようとしてくれるし。いや別にな、いまの通信の勉強のことだけで言ったら、別に朝からくる必要は何もないと思う。でも私は前から言ってるように、ユキエの都合で決めるのではなくて、誰かの都合で自分が生きていくということを、やっぱりユキエ自身は手に入れていかなあかんのじゃないかな、と思うんや」

「うん」

「というはやっぱり、ユキエの都合で生きてきた時間がずいぶん長い。普通に高校行ってる子はそうじゃないやん。働いている人もそうじゃない。いつも自分の都合で動けるわけじゃない。でもユキエは結構やっぱり一人で、まあいろんなつらいことがあったんやけど、結果として自分の都合で生きられるような環境にずっといたわけやろ。これが今後もずっとやったら、それは中々しんどいと思う」

「うん」

「だから少しずつ、今から人の都合に合わせて自分が行動するっていうことも手に入れていかないとあかんのじゃないかなっていうのが、私の思いなんや。だから私は時間通りに来いって言うんや」

「うん」

「このことは、きっとユキエのこれからにプラスになると思うねんか。それはすごい大事なことやと思う」

「うん」

「そこらへんアッコは強いなと思う。あいつ割と強いやん」

「うん」

「周りがガタガタしてても、やるべきことはやってる感じしない？」

「する」

「するやろ、なんか…。そういうところあの子強いで、やっぱり。だからユキエに必要なのはあの強さやと思うねん」

「うん」

「だからあと1年半の間に、ユキエは

あの強さを、どこかで手に入れないと
いけない。そしたら人生が…開けてく
る」

「ふふふ」

「絶対そう思うけど」

「うん」

「ここまで来れたんやから。ここまで
来れるっていうのは奇跡や。奇跡と思
わへん？こんなの…」

「うん」

「これドラマやで…。何かそんな風に
思わない？もうこんなほとんどドラマ
の世界や」

「うん、ドラマや」

「そうでしょ、これもうドラマの世界
や。でもこれからユキエは自分で自分
の人生を切り開かなあかんって思うで
…」

「言ってあげたいもん」

「誰に？」

「過去の私に」

「何て言ってあげるの？」

「“もうこんな変わっていくのに！”み
たいな。“何でそんな悩んでたんお前”
って…」

「ははは」

「“何してたん？”みたいなの…」

「過去の、髪の毛引っ張ってた私に、

“お前は、知ってるか”って…」

「“こんなことなってるねん。お前の2
年後は”ははははは…」

「ほんま、よかったな。そう思うわ。
何かこんなことを、まあ自分で、私の
語りっていうか、こんなのを語るのも
いいことや。自分で自分を振り返りな
がら…。人間ってな、苦しい時って過

去を語れないねん。だからユキエがこ
ういう風になんて変わってきたので、あの頃
はああやったとか、あの頃の私に言っ
てあげたいとか、そんな話が出てくる」

「何してるねんって…」

「そう何してるねんって…。お前はあ
の頃逃げなかったらこういう風になっ
てるねんでっていうことでしょ？その
通りや、まあよかった。でも、まだ道
半分や」

「うん」

「今までは、結構マイナスの世界で、
いっぱいユキエは生きてきたんや。ネ
ガティブって言ってたやろ。でも今、
ようやくユキエは普通に戻りつつある。
でもまだ0や、言うてることわかる？」

「うん」

「ユキエは、これからプラスを作っ
ていかなあかんのや。でプラスを作ると
きに必要なのはやっぱり、強さやと思
う、もうちょっとそれがある。わか
る？」

「そう」

「モエだって、あんな風に言ってたけ
ど、高校入学した時、もう学校やめた
いとか言ってたやん。いやや、いやや
って言ってたよな」

「言ってた」

「でもあれをやっぱりあそこまで、こ
の夏、数ヶ月の間にあそこまでになる
なんて、やっぱりあいつ強かったんや。
それが必要なんや。自分で自分を変え
られるだけの強さがある、やっぱり…。
これからプラスを作っていく。わかっ
た？」

「うん」

2年前の自分自身に「あんた何でそんなに悩んでんの、って言ってやりたい」と熱く語ってくれたユキエ。この思いこそが今の彼女のリアリティでした。決して洗練されたコトバではありませんが、彼女は力強く語ってくれます。過去の自分自身を相対化し、その自分自身という対象に向かって彼女は力強く叫ぶわけです。

